五省会ニュース

発行所
医療法人財団五省会西能病院
〒930 富山市五福1130
TEL (0764) 41−2481(代)
発行人　西能 正一郎

五省
一 至誠に悖るなかりしか
一 言行に恥ずるなかりしか
一 気力に缺くるなかりしか
一 努力に憾みなかりしか
一 不精に亘るなかりしか

こうして病院経営を

サンプルがない

病院は公益性があるということから、今まで手厚い保護を受けてきた時代が続いた。従って、病院に経営というものがなくても、何となくやってこられたのである。

しかしながら昨今、今までとは打って変わって手ひどい締めつけを受けるようになって、初めて病院経営という言葉も実体化してきたように思うのである。

どの病院にも、それぞれの設立の歴史があり、また独自の背景がある。従って病院経営は、それぞれの病院のノウハウがあり、それぞれの病院のユニークなものがあるはずで、理想的な病院経営のサンプルも、公式もないものだと思う。

人に始まって人に終る

また、経営というと、一般会社などでは、いかにして収入を増やし、いかにして支出を抑えるかということに社長は命をかけているわけで、非常に生き甲斐の仕事である。医療においては、収入の大部分を占める、自分の一番誇りとしている技術が保険点数で一本化されている。また支出の中でも最も多い人件費は医療法で枠決めされていて、思ったように節約できない。結局、われわれに残された手段は、ユーザーである患者さんの数をいかにして確保するか、また諸経費をいかにして圧縮するかという程度のことしか残されていないように思われる。

病院が売っているものは、人間へのサービスであり、また病院の主力も人間である。そのように考えると、病院経営は、やっぱり人に始まって人に終るといえるようだ。

理念の変遷

病院を開設して間もなくの昭和四十年ごろ、私は病院管理研修所で行われた病院長セミナーを受講した。三週間ほどのコースだったが、毎日手を変え品を変えして、病院は地域のためにある、という思想を徹底的に叩き込まれた。

受講者の殆どが公的病院の院長で、私は場違いの所にきた思いで全日程を過ごした。厚生省がこんなことで説得しようとしても、われわれ個人病院は、そんな悠長なわけにいかないぞと、腹の中で抵抗していた。

今度は説得役に

しかし、それから数年たち、職員数も百人を越えるようになると、この人たちの生活を保障するためにも地域になくてはならない病院として位置づけることが必要であると考えるようになってきた。

折にふれて職員を集めて、患者さんがわざわざたずねてくる病院にすること、また一度きていただいた患者さんに、また利用してもらえる病院にすること、と今度は私が説得役になっている。これさえできれば、医療界にどのような嵐が吹いても、世の中に病気がある限り我々は生き延びることができるんだと。

今では、そのようなことを考えてやってきている。＝病院長セミナーでの西能院長講演から＝

西能病院を訪れた住法相㊨、㊧は西能院長

住栄作氏（医療法人財団五省会西能病院理事）の法務大臣就任祝賀会は、二月十九日、富山第一ホテルで、千三百人が集まって開かれた。富山県選出の国会議員も全員顔を揃えた。住法相は「大臣になれたのも皆さんのおかげだと感謝している。精一杯がんばっていくから、ご鞭撻、ご叱正をいただきたい」と、お礼を述べた。

なお、一月から二月にかけて、各市町及び各地区で新年会をかねた大臣就任祝賀会が催された。

開院二十二周年にあたり

西能 正一郎

良い医療を安く提供

皆様方に育てていただいた病院

三月二十一日は、富山市星井町で、西能整形外科医院を開業した日であります。西能病院では、この日を開院記念日と定めており、今年で二十二回目を迎えました。現、横田病院長、横田力氏のご厚意により、先代院長の遺された木造病院を使わせていただいたのが開業出来たポイントでありました。

三十八年暮に、五福のこの地に木造の病院を建てて引っ越しましてからも、整形外科の専門病院とは言ってみても、考えてみれば、設備はまことにお粗末で、名ばかりの病院でありました。二十年前の医療設備と、現在とでは隔世の感があります。これは単にお金がなくて設備出来なかったということではなくて、その程度でも病院として通用する時代であったといえましょう。

その後、医療の技術、機械の進歩のみならず、患者さんが医療の質を求められ、私共が対応してきた結果が現在の病院であります。昨年の開院記念日にあわせて、西能病院も、第三期増改築工事を完了し、再出発したのであります。設計、工事共に世の中にないような病院にはとても出来ませんでしたが、二十年間の病院をあずかった経験から、こうありたいと思うものを全て取り込んで仕上げました。私共にとって二十年前には夢にも考えることが出来なかった病院で、あたりまえのようにして働かせてもらっていることが、勿体ないとさえ思われる昨今であります。

ご承知の通り、政府の医療費削減策が現実のものとなり、医療の冬の時代を迎えました。病院の倒産のニュースがチラチラ見られるようになり、これからも、まだまだ増えることでしょう。われわれ医療人は、良い医療は高いものだという固定観念からはなれて、安くても良い医療を提供することがぜひ必要であります。

この難問を皆さんと力をあわせて解決しないと、国民のための医療が手のとどかない所まで逃げて行ってしまいます。病院の機能の良し悪しは、病院の大きさや、設備や機械によって評価されるものでなく、病める人がいかに安心して適正な医療をうけられるかにあると思いますので今一層の精進が必要であります。

私共は、この二十年間、団結して少しでも良い医療をさしあげることを目標として努力して参りました。建物が大きくなり、職員の数も増えて来ますと、必ずしも理想通りにはゆかないことも良く存じております。せっかく、機械や設備が良くなったのに、それを使う人の心が低下したのでは話になりません。良くなった病院に負けない良いサービスが出来るよう全職員と共に心を引き締めて、地域の皆様方の選択をより確実なものにする努力を致します。

医療に対する国の考え方がどのように変ろうとも、如何なる時代になろうとも、世の中に病める人がある限り病院は必要であります。皆様方に育てていただいたこの病院を、ちょっとや、そっとの時代の流れの変化で押しつぶされてしまっては申しわけのないことだと思っております。

あすなろ

暑さ寒さも彼岸まで―三月末から春暖となる。富山の地はまだまだ雪深く、水温（ぬる）むまでには間があるようだ。が、春の足音は一歩一歩と確実に近づいている。そんな二十一日、西能病院は、開院二十二周年を迎えた▼富山市星井町で産声をあげた昭和三十七年三月二十一日は春雪が舞うた。幽霊屋敷の病床十床、職員八人の小さい世帯から、いまはスマートな鉄筋五階建て、職員百二十余人の大世帯にふくれあがった。「良い医療を提供しよう」と、院長はじめ全職員が一丸となって燃えつずける〝鬼手仏心〟（西能病院待合室の額）の賜物である▼多くの患者さんたちの信頼の声が、それを裏付けている。本紙の「大地を踏む」の方たちも異口同音に「病院のみなさんの温かい心と励ましが生きがいになっている」と感謝。大山町の岡田尚さんが、「バカさわぎや、お祭りさわぎは意味がない。励ましが何よりも元気づけてくれる」と、しみじみ語っていたのを思い出す。▼全身の関節痛と闘っている桐沢喜美子さん（「大地を踏む」⑰参照）は、「わたしは、昭和三十九年から二十年間、ずっと西能病院のお世話になっております。親身になってくださるのが何よりも嬉しいです。とくにリハビリの荒井先生には……。そろそろ花見を楽しみにしとります」と桜を待つ。花だよりが南の国から、ちらほらやってくる―。

西能病院 二十二年の歩み

37年3月　富山市星井町40番地に西能整形外科医院を開設（収容施設10床）
38年9月　救急車（プリンス）購入
38年10月　富山市五福1130に西能整形外科病院建設着工（木造病棟）
38年12月　同病院完成、開設（18室47床）
39年5月　救急病院に認定
39年10月　病院第一期増築工事に着工（鉄筋コンクリート三階建て塔屋一階）
40年4月　第一期増築工事完成、開設（27室77床）
41年12月　星井町の医院を廃止
42年3月　救急車（ジープ）購入
42年10月　患者通院用のマイクロバス（三菱ローザ）購入。
43年8月　病院第二期増築工事着工（鉄筋コンクリート四階建て塔屋一階）
47年3月　第二期工事完成、開設（34室116床）
47年12月　患者通院用バス（三菱中型620）購入
49年1月　外来及び医事部門の改装工事完成
49年7月　病歴室を設置、病歴を整理分類
50年2月　外来患者累計50万人を突破
51年2月　リウマチクリニック開設
51年12月　外来医事部門コンピューター設置
53年4月　入院患者累計50万人を突破
53年5月　形成外科クリニック開設（北里大学市田先生）
54年5月　救急車（トヨタハイエース型）購入
54年10月　内科外来の診療開始
55年3月　病院組織を変更、「医療法人財団五省会」の認可
55年6月　新型通院バス（三菱ふそう）購入
55年11月　第六回日本病院学会（富山）で病院長が副学会長
56年3月　病院新聞「五省会ニュース」発刊
56年5月　「特定医療法人」認可
56年9月　第三期増改築工事着工
57年7月　第七回日本病院学会（神戸）に病院長以下二十人出席
57年9月　第八回日本病院学会（東京）に病院長以下十五人出席
58年3月　増築棟が完工、既設棟の改築工事に着手
58年3月　第三期増改築工事完了。病床百八十五床
58年4月　古沢富美総婦長が定年退職
58年9月　内科病棟を新設
58年9月　第九回日本病院学会（浜松）に病院長以下十三人が出席
58年11月　堀政夫事務長が定年退職

健康法の問題 (20)

矢野三郎

曽野綾子著「戒老録」に、老化した高脚蟹（たかあしがに）の話がのっている。年とって手も脚もなくなった蟹は、餌を口まで近づけてやっても、口は固く閉じられていて開かないという。この事実に胸を打たれた著者は「どうも脚と頭の動きは運動作用になっているような気がするんですよ。ぼけたくないと思ったら、歩くほかないみたいに感じるんですけどね」といっている。

昔から「足が弱ると長生きできない」と、いわれているが、これは医学的にも正しいことがわかってきた。東京学芸大学の小野教授によると、人間の生命を最終的に決定しているといえる大脳の生理的状態を維持するためにはどうしても、骨格筋が力を出している時に送られてくる情報が必要であるという。

その根拠として、アメリカの宇宙飛行士の訓練所で、全く健康な、しかも充分に鍛錬された青年男子に、八日間の臥床安静を保たせてみたら、精神作用が変調し、脳波にも異常所見が出てきたという報告や、完全な植物人間になってしまった女性が、亡くなってから脳の重量を量ってみたら、成人の平均が一二四〇グラムなのに対して、九〇〇グラムしかなかったという話をあげておられる。

運動は心臓や肺臓の働きを強めたり、動脈硬化を予防するといわれているが、運動は脳の働きにも影響を与えるわけである。いずれにしても運動不足は健康上有害であることをすべての人は知っている。しかし、人間は本来、なまけ者である。とくに中高年になると、体を動かすことが億劫になる。しかも朝おきた時、あるいは寝る前に、自分で工夫した柔軟体操をしている方が多い。動かせるところを、可能な限りに動かすこと、これが精神的にも肉体的にも老化を予防する良い方法である。

八十歳まで現役として働かれたある牧師は、病気で入院中でも、退院したらすぐ立上れるように、ベッドの上で足関節の運動をしておられた。また、ある老学長は、電車に乗って足ゆびの運動をしておられた。

運動というと、テニス、水泳、ジョギングなどと積極的な体力づくりを考え勝ちであるが、中高年の運動はあまり張り切り過ぎないこと、気負い過ぎないことが大切である。昔取った杵づかいになるのはけがのもとである。

また運動鍛錬性貧血というものがあり、中高年のジョギング愛好者の間にも、相当ひどい貧血になっている人がいるということである。

（富山医科薬科大学教授）

可能な限りに動かす
精神的にも肉体的にも老化を予防

きねづかと、腕前過信になるのは、順天堂大学の石河教授が書いておられる。

心臓病の人がジョギングをするなどはもってのほかであるが、このような人でも手を動かすことはできるし、歩くこともできる。走れるうちは走れ、走れなくなったら歩け、ブラブラ歩きでも、歩かないよりははるかに健康的、足が動かなくなったら腕を充分に使えと小野教授はいっておられる。

一般に高齢者で元気な生活をおくっている人には、

こだま
入院患者さんから

医療の心で限りない発展
開院二十二周年、新築一周年記念日に

"自動ドア"が信じられなかった自分が、今ではドアの前に立てば、自然に開いてくれるのが当たり前のようになり、高い所へ行くにはエレベーターが運んでくれるものと、信じるようになりました。

一階の広い待合室にはオレンジ色の洋ランが、私たち患者を暖かく迎え入れ、一歩奥へ入ると、優しいメロディーが傷ついた心を和ませてくれます。また、チョット奥へ行くと、「あすなろ」のコーヒーの香りが……。

私がはじめて富山市星井町の西能病院を紹介されたのは、入院の選びとなった昭和三十九年のころを思い出すとき、現在の立派な病院が想像できたでしょうか。ここまで来るには、院長先生はじめ奥様、当時の職員の皆様の血のにじむご苦労の賜物と信じてやみません。

風が吹けば ガタガタ

「ねんりん」に、くわしく書いてありますが、暗い廊下にゴザを敷いて待合室がわり、奥のトイレに行くのも大変でした。患者さんを二階へ運ぶのも担架で階段から、食事を運ぶのも階段から。風が吹けばガタガタ、雨が降れば雨もり、今から考えれば、本当に大変なことばかりでした。

開院から二十二年、私の初入院から二十年の歳月が流れ去りました。そして移り変る時代に則応して先端技術を取り入れられた院長先生の素晴らしいアイデアのもと、昨年三月、病院の新改築が完成し、早くも一周年の記念すべき日を迎えました。

感謝の気持で一杯

こんな静かな明るい病室、寒さ知らずの暖かい中で今日も療養できる自分が、本当に感謝の気持ちで一杯です。百八十五床のベッドも満員になり、遠くは山形、長野、新潟、岐阜と、他県からもたくさん入院してこられ、驚いております。

私の、このたびの西能病院の入院は五度目で、人生では初めての長期療養生活となりました。入院当時は両膝関節の痛みがひどく、人工関節を進められましたが、微熱が出て手術を断念しました。そのあと、一生懸命リハビリに励みましたところ、昨年暮れから杖なしで歩けるようになり、自分の足でトイレに行ける喜びを味わっております。

よい勉強に

長い入院生活で、いろんな人と出会い、いろんなことを学び、よい勉強になりました。「西能病院にきて、納得のいく説明が得られた」と、喜んでおられる患者さんを何人も見うけました。

どんな機能が良くても、設備が良くても、病める者の心が慰められなければ意味がないと思います。「五省会ニュース」の新年号に院長先生の"サービスで決める病院の評価"を読ませていただき、西能病院の限りない発展が、ここにあるのだと、深い感銘を受けました。

＝富山市日俣　中島トミ子（五二）＝

筆者偶感
病院サービス③

――このシリーズで二回にわたって病院の医学的サービスについてお話合いをしていただきましたが、次に一般サービスについてお願い致します。この一般サービスが、病院を訪れる人たちにとって一番頭にくるようですね。国公立の大病院ほど職員の態度が大きい、事務手続きにも手間がかかり結論がなかなかでないといった不満が多いといわれます。職員の接遇教育なんかは行われているのでしょうか。

村田　うーん、院長としては考えないこともないんだが、組織が大きくなってきたでしょうか。しかし、ともかくあなたのおっしゃるようなことは本当だ。国立が一番悪い、以下公立、市町村立と順々に……。

富山県立中央病院では、病棟を尋ねても数字に沿っていきなさいと、こうでしょう。ぼくもときどき尋ねられたけど、病棟の近くまで付き添ってやりました。しかし、いまの若い人はそんなことがないですよ。分らなければ受付で聞きなさいというわけです。だから、大きな病院ほど患者がどこをどういったらよいのか分らないことが多いんじゃないの。

診察券をだしていても自分の名前が呼ばれないことがあるんですよ。窓口で言っても、まだです、でしょ。

こうした点、開業医だったら、来る人の顔を知っているから、あんたこられたか、容態は……と話もあるわけだろうが、大きな病院になると、みんな初めての人のような感じがするからね。極端な話、人間がきたんじゃなくてお金がきたような感じがしてね。まあ親切な人もいるけど、一般的にいってそうなのじゃないかな。

職員の接遇教育

――そうした点、職員の接遇教育も行われていると思いますが……。

村田　それがなかなかできないんだなあ。

西能　私はね、大学病院や県中は一般サービスが悪いといってみても、行く人自身が一般サービスのよいことを期待せずに行っていると思うんです。大抵の人は、むしろ医療の内容面に期待している。ですから、一般サービスが少しぐらい悪くても辛抱し、診てもらった結論が早く適確であれば、それに越したことはないということで、期待度が私たちの病院と大病院とでは違うんじゃないかと思うんですね。

だからこそ、大病院は生き残れるわけです。私どもは、医療レベルが高くても、それだけで威張っておれる状況じゃありませんから、やはり職員には一般サービスについて教育をしますね。

―対談―

県立中央病院名誉院長　村田　勇先生　×　西能正一郎先生　西能病院長

"自分のために患者サービスを"

――教育の内容は……

西能　私はいつもいっていることなんですが、患者さんがきてくだるから、われわれは食べていけるんだと。そういう意味で、自分たちが生きていくためにはどうしても良いサービスをして明日もまたきてもらえるようにしなければならない。いつなんどきでも食えんようになるぞ、というのが論旨なんです。

大体がいうて悪いが、病院のためにがんばりましょうとか、患者さんのために一生けん命やりましょうとか、格好のいいことをいってみたところで、本音は月給をもらうためにやっている。そんな原点へいっぺん戻ってみると、いかにサービスしなければならないかが分るだろうということです。

QC活動の試み

――ここでちょっと新しい試みを申し上げると、昨年四月からQCサークル活動（品質管理活動）を始めたんです。発想は、病院が売っているものは医療サービスという商品である。この商品の品質管理をし、いかに患者さんにいい商品を提供するかが勉強しようというわけです。今回のテーマは「どうしたら患者さんに喜んで利用してもらえる病院になるか」です。

そしたらね、でてくる結論は、私たちはこうしよう、こんな努力をしようということよりも、病院にこうしてもらったらいい、ということばかり。たとえば、バスを増やしたらよいといったふうな。

そこでQCサークルの中心になっている職員に尋ねて初めて気付いたんですけれど、病院からもらう月給が規程どおりなのので、病院のサービスがよかろうが悪かろうが、或いは病院の業績が上がろうが下がろうが、本気になって考えるものがいないということです。

つまり、病院の業績の悪いときは月給を下げ、業績のよいときには上げるということでも考えないと、サービスは地につかないと分りました。

わたしはこう思う

私的病院 人間関係に非常な配慮
医療サービスだけで乗り切れぬ

一般サービスの違い

――そうお聞きします公的病院と西能病院とでは、一般サービスに対する取り組みの違いがよく分りますね。

村田　そう、公的病院のサービスというのは設備的なサービスが主体になってくるし、私的病院は人間関係が主体になってくるということでしょうね。

でですから、私的病院は患者とのコミュニケーションをよくしていこうというのが一つのサービスだけれど、公的な大病院はそういうものじゃなくて、たとえば患者に快適な環境を与えるために暖房をどうするかとか、彩光をどうするか、ゴキブリの駆除をどうするか、そんな設備環境に非常に力を入れるわけです。

先生のほうは、患者に対して感情的な問題をいかにうまくやっていくかということ、そうじゃないんですか。

西能　そうなんです。先ほどのQCサークル活動で、最終的に患者さんとはメリットにならない。結局、管理職も職員も年功序列型の体系に組み込まれているので、サービスにはなんの切実感もないわけです。

本当をいいますと、私はQCサークルによってわーっと盛り上がる目標が生まれてくると思ったんですがね。

村田　いま先生のいわれたようなこと、その効果はどんな尺度で表れてくるのか、判定がむずかしいんじゃないの。

ところが公的病院が力を入れている設備だと、今度きた管財課長は上手にやるじゃないかといったふうに、結果がきちっとでてくるからよいんだけれど……。

西能　私は、公的病院というのはあくまで医療そのものの内容でもって存在意味は十分あると思います。また、それを前提にして県なり国なりからお金がでているわけです。私、それでいいんじゃないかと思います。

大体が公的病院と私たちの病院を同じレベルで比較しても比較にはなりません。

病院の機能分化

――そこで、いま病医院の機能分化ということがいられていますね。現状はどうなんでしょう。

西能　今度の医療法の改正案では、地域医療計画を策定して機能分化せよという話ですね。先生はどう思われますか。

村田　先生のおっしゃるのはランク規定ということですか。

西能　そうです。

村田　ランクってつけれるかな。どこを基準にランクをつけるの。ベッド数の大きさとか設備とかいろんなことをいっているわけね。そんなことでつけれるのかなあ。

（つづく）

わたしはこう思う

公的病院 施設・環境面に力点
実らない職員の接遇サービス

一般サービスの違い

――そうお聞きします公的病院と西能病院とでは、一般サービスに対する取り組みの違いがよく分りますね。

村田　そう、公的病院のサービスというのは設備的なサービスが主体になってくるし、私的病院は人間関係が主体になってくるということでしょうね。

でですから、私的病院は患者とのコミュニケーションをよくしていこうというのが一つのサービスだけれど、公的な大病院はそういうものじゃなくて、たとえば患者に快適な環境を与えるために暖房をどうするかとか、彩光をどうするか、ゴキブリの駆除をどうするか、そんな設備環境に非常に力を入れるわけです。

先生のほうは、患者に対して感情的な問題をいかにうまくやっていくかということ、そうじゃないんですか。

西能　そうなんです。先ほどのQCサークル活動で、最終的に患者さんとはメリットにならない。結局、管理職も職員も年功序列型の体系に組み込まれているので、サービスにはなんの切実感もないわけです。

本当をいいますと、私はQCサークルによってわーっと盛り上がる目標が生まれてくると思ったんですがね。

村田　いま先生のいわれたようなこと、その効果はどんな尺度で表れてくるのか、判定がむずかしいんじゃないの。

ところが公的病院が力を入れている設備だと、今度きた管財課長は上手にやるじゃないかといったふうに、結果がきちっとでてくるからよいんだけれど……。

西能　私は、公的病院というのはあくまで医療そのものの内容でもって存在意味は十分あると思います。また、それを前提にして県なり国なりからお金がでているわけです。私、それでいいんじゃないかと思います。

大体が公的病院と私たちの病院を同じレベルで比較しても比較にはなりません。

病院の機能分化

――そこで、いま病医院の機能分化ということがいられていますね。現状はどうなんでしょう。

西能　今度の医療法の改正案では、地域医療計画を策定して機能分化せよという話ですね。先生はどう思われますか。

村田　先生のおっしゃるのはランク規定ということですか。

西能　そうです。

村田　ランクってつけれるかな。どこを基準にランクをつけるの。ベッド数の大きさとか設備とかいろんなことをいっているわけね。そんなことでつけれるのかなあ。

（つづく）

ねんりん (21)
西能病院のあゆみ

司会　昭和四十年四月の病院第一期増築鉄筋三階建て（二十七室、七十七床）のささやかな竣工式は感激だったわけですね。

一同　はい、院長が涙ぐんで、声がつまってしゃべれなかった"と、いわれましたが、みんな、たち、みんな、もらい泣きしました。

川西　院長と、いっしょに泣いた。"感激の日"は忘れることができません。それから、私は星井町に最後の最後まで残った一人です。津田さんや伏木さんも一緒でした。入院患者さんを五福へ送り届けたあと、大掃除をやりました。"おんぼろ"でしたが、去るときは感慨無量でした。新しい鉄筋に出勤したとき、先に星井町からきていた患者さんに"ご苦労さんでした"と、ねぎらいの声をかけられ、私たちが迎えられたような感じでした。（笑い）

津田　私は星井町の最後の夜の宿直でした。大掃除でネズミのフンがいっぱい。こんな、ぼろっちゃい建て物に、よくもおったもんだと思いました。でも、いざとなると、住みなれたところだけに、名残りが尽きない気持ちも涌いてきました。星井町から五福へ移った患者さんは、それこそ大喜びでした。

出席者（紙上参加を含む）△元勤務者＝開発正子、三日市久子、竹腰美奈子、池田千佳子△現勤務者＝津田勝美、川西信子、広長百合子、鐙貢、伏木峯子、米田絹代、寺崎民子、津田美智子、井上千恵子、森田由紀△西能正一郎（院長）、西能嵐（副院長）、堀政夫（顧問）、古沢富美（顧問）△司会＝中島曠（総務部長）、石倉喜一（サービス担当）＝敬称略＝

"おんぼろ"に名残り
一緒になれて嬉しかった

伏木　一番嬉しかったのは、星井町と五福に別れ別れになっていたのが一つになり、みんな一緒に顔をあわせて仕事ができるようになったことです。私は窓口の事務を担当していましたが、日常の煩雑さも解消し、ほっとしました。

司会　一つになった五福の方は、木造二階建てを、そのまま残して、鉄筋三階建てとの間を渡り廊下でつないでいたそうですが、建物の概要を簡単に……。

一同　鉄筋の一階が待合室、診察室関係、手術室、薬局、二階が病室、ナース室、三階が特別室、院長室、管理室関係、会議室などと、塔屋に洗濯室と機械室がありました。

木造の方は、一階が病室、ナース室、ギプス室、訓練室、給食室など、二階が病室とナース室でした。

石倉　渡り廊下の横に電気室とボイラー室ができました。それで私がボイラーの担当になり、一生懸命勉強して、ボイラーと危険物の免許をうけたことを覚えとります。ボイラーはスチーム用で、確か四十年の秋から動いたと思います。それまで"豆たんあんか"をかかえていた患者さんたちは大喜びでした。

院長　実は、三階の一部を住宅部門に設計していたのですが、手直ししているうちになくなってしまいました。そこで急きょ、近くで土地を買って家を建てました。（笑い）

石倉　私ごとで恐縮ですが、第一期工事中は、すぐ側のプレハブに住んでいたのですが、工事のじゃまになり、機械で持ち上げられて、あっちへいったり、こっちへいったり。あげくのはて、かたがってしまって住めんようになりました。「こりゃあかん」ということで車庫の二階へ逃避しました。（笑い）

司会　どうも、ご苦労さんでした。

三日市　鉄筋の新しい建物になってから、嬉しさのあまり部屋の電気のスイッチを全部入れていると、院長が「一人なら一つだけつけなさい」と、節約を注意されました。

鉄筋二階の十二人床病室

思い出を語る〈13〉

"選択を受け得る病院に"
3月21日　開院二十二周年記念式

西能病院の開院二十二周年記念式は、三月二十一日午前十一時から同病院五階ホールで挙行。つぎの十二人の職員を永年勤続者として表彰。

その席上、西能院長は、「昨年の第三期増改築は、私の二十年間の病院経営者としての経験の中で、もっとも勇気のいる事業の一つであった。しかしながら、職員たちの絶大な信頼と協力が、ふんぎりをつけてくれたものだ。そして、この一年間、患者さんの選択を受け得る病院として成長したことが、だんだんはっきりしつつある。現代の医療は冬の時代である。これを、地域の人たちの暖かい選択を力にして切り抜けていきたい」と挨拶。

病院の第三期増築工事は、二カ年近い歳月を かけて昨年三月に完成、同年四月一日から内科を充実、内科病棟を新設した。最新設備で患者さんの安全に万全を期し、"信頼と奉仕"をモットーに良い医療を心掛けてきた。

患者さんからは「思いやりがあふれている」と評判がよく、順調にすすんでいる。

永年勤続表彰者

△二十年（二人）伏木峯子、鐙貢

△十五年（三人）奥平美和子、荒井紀夫、関待子

△十年（三人）安川敏一、吉田美喜子、上不雅子

△五年（四人）桃井玲子、新川弘美、一島洋美、塚原博子

続 ハリ治療
新しく創造して

ハリ治療の歴史、現状については前回までに簡単にふれてきました。先人たちの臨床実績をもとに淘汰され、進歩し、集成されながら今日まで二千年以上の歴史を持ち得た根源は「効くから」の事実が存在しているからでありましょう。

しかし、理論的、科学的な現代社会にあって、長い歴史を有していることをもって有効だと、あぐら"をかいていることは許されません。かといって、現段階における科学で証明されないからといって、目の前に示された事実を見ようともしないで否定してしまうことも大きな間違いです。

現代に生きる私達は、先人が創造してきたハリ治療のエキスを謙虚に引き継ぎ、そして、現代に生き、未来に生き抜く理論的な根拠、科学的な証明をもったハリ治療を新しく創造していかなければなりません。

ハリをあなどらず、なおかつ過信することなく、特別に騒ぎ立てることもなく、静かに臨床に応用していくことによって、真実の姿として正当に評価されなければなりません。

その意味においても、私達は、一日も早く臨床的な証明を始めたんです。

にハリの適応医療サービスという商品の品質管理をし、いかに患者さんにいい商品を提供するかが勉強しようというわけです。今回のテーマは「どうしたら患者さんに喜んで利用してもらえる病院になるか」です。

そしたらね、でてくる結論は、私たちはこうしよう、こんな努力をしようということよりも、病院にこうしてもらったらいい、ということばかり。たとえば、バスを増やしたらよいといったふうな。

そこでQCサークルの中心になっている職員に尋ねて初めて気付いたんですけれど、病院からもらう月給が規程どおりなのので、病院のサービスがよかろうが悪かろうが、或いは病院の業績が上がろうが下がろうが、本気になって考えるものがいないということです。

つまり、病院の業績の悪いときは月給を下げ、業績のよいときには上げるということでも考えないと、サービスは地につかないと分りました。

試みを申し上げると、昨年四月からQCサークル活動（品質管理活動）を始めたんです。発想は、病院が売っているものは医療サービスという商品である。この商品の品質管理をし、いかに患者さんにいい商品を提供するかが勉強しようというわけです。今回のテーマは「どうしたら患者さんに喜んで利用してもらえる病院になるか」です。

そしたらね、でてくる結論は、私たちはこうしよう、こんな努力をしようということよりも、病院にこうしてもらったらいい、ということばかり。たとえば、バスを増やしたらよいといったふうな。

そこでQCサークルの中心になっている職員に尋ねて初めて気付いたんですけれど、病院からもらう月給が規程どおりなのので、病院のサービスがよかろうが悪かろうが、或いは病院の業績が上がろうが下がろうが、本気になって考えるものがいないということです。

つまり、病院の業績の悪いときは月給を下げ、業績のよいときには上げるということでも考えないと、サービスは地につかないと分りました。

公的病院にQCサークルがあるかどうか、或いは役所にあるかどうか知りませんが、かりにあっても成り立ちませんね。

大病院の院長先生が職員に接遇サービスをしろといわれても、職員にとってはメリットにならない。結局、管理職も職員も年功序列型の体系に組み込まれているので、サービスにはなんの切実感もないわけです。

本当をいいますと、私はQCサークルによってわーっと盛り上がる目標が生まれてくると思ったんですがね。

先生のほうは、患者に対して感情的な問題をいかにうまくやっていくかということ、そうじゃないんですか。

西能　そうなんです。先ほどのQCサークル活動で、最終的に患者さんとはメリットにならない。結局、管理職も職員も年功序列型の体系に組み込まれているので、サービスにはなんの切実感もないわけです。

本当をいいますと、私はQCサークルによってわーっと盛り上がる目標が生まれてくると思ったんですがね。

村田　いま先生のいわれたようなこと、その効果はどんな尺度で表れてくるのか、判定がむずかしいんじゃないの。

ところが公的病院が力を入れている設備だと、今度きた管財課長は上手にやるじゃないかといったふうに、結果がきちっとでてくるからよいんだけれど……。

西能　私は、公的病院というのはあくまで医療そのものの内容でもって存在意味は十分あると思います。また、それを前提にして県なり国なりからお金がでているわけです。私、それでいいんじゃないかと思います。

大体が公的病院と私たちの病院を同じレベルで比較しても比較にはなりません。

病院の機能分化

――そこで、いま病医院の機能分化ということがいられていますね。現状はどうなんでしょう。

西能　今度の医療法の改正案では、地域医療計画を策定して機能分化せよという話ですね。先生はどう思われますか。

村田　先生のおっしゃるのはランク規定ということですか。

西能　そうです。

村田　ランクってつけれるかな。どこを基準にランクをつけるの。ベッド数の大きさとか設備とかいろんなことをいっているわけね。そんなことでつけれるのかなあ。

（つづく）

大地を踏む ⑰

富山市田畑南部　桐沢　喜美子さん（六〇）

〝孫の手〟でブザーを押す喜美子さん

慢性関節リウマチで体が不自由な喜美子さんは膝がちょっと曲がるだけ。どうにか歩けるが、敷居をまたぐのがやっと。手の動く範囲は、膝から胸ぐらいまで。

この喜美子さんを、いつも温かく見守り、世話しているのが夫の憲次さん（六四）だ。「少しでも楽をさせてやりたい」の一念が、いろんなところにこもっている。

昨年二月、特別注文の自動式ベッドを入れた。腰から上の方が自動式で喜美子さん一人で寝起きできるようになった。ベッドの高さも、いい按配だ。

憲次さんが考案した自慢の〝孫の手〟は竹製、長さが八十㌢もある。その名のとおり、喜美子さんの手がわりで、いろんなことに役立っている。寝たままで家族を呼びだすブザーを押す、下からひっかけて物を拾う、上からひっかけて物をおろす、枕や、ふとんを直す、かゆいところをかく、その他いっぱい。

ベッドの横には、薬や日用品を入れた箱をいくつも適当な高さに配置。寝たままでテレビのチャネルが回せる。洗面所もトイレも特別あつらいだ。いつも一緒にいる憲次さんは、喜美さんが、一人でできない着替えや、食事などの介添えに、いたれり、つくせり。

夫の思いやりが支えに

喜美子さんは、十五歳のとき、屋根から転落、それがもとで右大腿部が化膿、二回手術したが完ゆしなかった。歩くのが不自由になり、坐れなくなった。三十九年七月、西能病院で初受診し、右大腿骨々髄炎と診断され、四十年五月に手術した。よくなり、元気がでた。ところが、五十年七月に慢性関節リウマチと宣告された。

それからの喜美子さんの病症は語りつくせない。西能病院へは十回入院し、六回も手術をうけた。現在も一週間に一回、通院している。

喜美子さんのやすらぎは、窓の外の小鳥たちと遊ぶひとときである。スズメ、カラス、ハト、キジが毎日訪れる。ご馳走はパンくず。小学校と保育所から帰ってきた孫二人（男）と、ベッドでテレビのマンガを見るのも楽しみであるという。長男夫婦はつとめ。

喜美子さんはいい切る。

「苦しみを乗り越えて、一日一日を有難く、明るくやってきております。病院の皆さん、家族、周囲の人たちに感謝しています。思いやりが支えになっています。おとうさんが、一番の頼りです」。

側で憲次さんが「わしがせにゃ、だれもするもんおらん」とニコニコ顔。

老夫婦愛が、むつまじく大地に根をおろしていた。

入院雑感

春立つや　看護婦の声　なまめけり
退院の　あいさつ春の　雪の中
（ご親切に感謝して退院します）
＝八尾町西新町　長谷川保一＝

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

美しいものが見えてきた

〈第十九信〉

松下英勝

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

今年は、何かしら、とびっきり善いことがありそうな気がします。それが夢に終ることも自覚し、〝むじゅん〟だらけの毎日を、それでも一生懸命に頑張って生きています。

第十八信（一月一日号）の補足についてペンを進めます。ジェットコースターに乗って、ほんの僅かの一瞬に、ずい分たくさんのことが、走馬灯の如く、あっという間に去来したと書きましたが、そのとき頭に浮かんだのは……。

実は、〝献体登録〟云々のところで、ずい分悟ったかの如く、大仕事を終えた時のように清々しい気分です――なんて書きましたが、本当は、そうではなかったのです。小心者の私は、夜、何回も目覚めたあと、〝献体〟が、長い間の安置所の一人ぼっちの恐怖と孤独（孤独の辛さは生きているときから味わっていますが）に、悲鳴をあげて、とり乱す？のでは…。それを考えると眠れません。

（そんなことはない）と、自己暗示をかけ、（俺は強い）と、自分にいい聞かせても頭の方が納得しません。丁度、そんな〝カットウ〟の時期にジェットコスターに挑戦したのです。

よくやった、偉いぞ！

ジェットコスターに賭けた献体のふんぎり

ヨシッ！乗り極められればジッと、献体に耐えられる。みっともない結果に終ったら、神戸大学へ手紙を書き、出来るだけ早く、お役目を終えられるように頼むことにしよう。ジェットコスターに賭けたのです。

そして、耐えました。オーバーかと思いますが、胆っ玉の小さい男の死後の…献体の…ふんぎりをつけてくれたのがジェットコスターだったのです。

一つ一つの悩みを克服して心の整理をし、人間は強くなります。乗った自分より、乗せた園長や早拍指導員の勇気も凄いものです。

自分は自分をいじめることもあります。けれども自分を労ってやることもあります。ナルシストほど病的ではないにしても、自分は自分を時折り「良くやったぞ、お前は偉いぞ！」などと、ほめてやることさえあります。

自分は、束の間でもよい、リゴリティックに完全主義を貫きたいとする時もあります。

仮りに仲間と餓えたとき、神への供物すら盗み仲間に食べさせてあげられる高潔な生活をも営む、営みたい、そんな気のする時もあります。

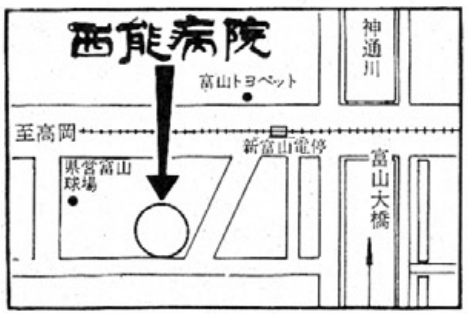
激しい熱い血のたぎる自分も、語呂合せじゃありませんが、ネ年でチュー。今年は万事チューぐらいでチューヨー（中よう）にすごします。（姫路市打越一一〇〇、重度身体障害者授産施設、愛光園）

医療法人　西能病院の診療体制

●年中無休・24時間受付の診療体制を敷いております。●救急車（2台）は、要請により出動致します。

一般受付時間（日曜・祭日は休診）

診療科目	午前	午後
整形外科	月～土 8:30～12:00	月～土 16:00～19:00
リハビリテーション科	月～土 8:30～12:00	月～土 13:30～19:00
内科	月～土 8:30～12:00	月～土 病棟回診
形成外科	毎月1回 8:30～12:00	（診察日は受付でおたずねください。）



◆医療コンサルタント（毎週土曜14:00～16:00）

新たに医療相談日を設けました。（院長、又は副院長が相談にあたります。）整形外科の病気はもちろん、関連ある色々な病気について治療・予防のためのアドバイスを致します。又ご希望があれば専門の医師への紹介も致します。お気軽にご利用下さい。事前に、受付に時間予約をして下さい。（TELでも可＝0764－41－2481代）

◆メディカル・ソーシャルケースワーク（毎日8:00～17:00）

医療費や入院などにかかわる経済問題・退院後の生活設計など、病気以外の心配事や悩みに専門のケースワーカーが親身になってご相談に応じます。（秘密厳守）ご遠慮なく、受付や看護婦に申し出て下さい。

◆栄養指導（毎週水・土）

現代病といわれている肥満・糖尿病・その他の病気にたいして、専門の栄養士が具体的な食生活を指導致します。受付にお申込下さい。

◆重病患者さんの送迎について

重症のため、一般の車で搬送できない患者さんには、入退院にあたって、病院の患者専用車をご利用いただけます。受付に申し出下さい。

《交通機関》
市内電車……新富山電停下車・徒歩2分
地鉄バス……新富山停留所下車・徒歩2分
通院バス（順路）……西能病院→富山大橋→丸の内→新富町→♀富山駅→桜橋通り→♀西町→♀旅籠町→丸の内→富山大橋→西能病院
（♀は通院バス常時停留所、その他臨時停車します。）